

次世代の小規模公園のあり方と管理方法に関する研究

～地域住民の孤立孤独予防に資する公園～

■取組の概要

小さい公園（街区公園）は姫路市に 823 公園あり、最も身近な公共施設であるが、担い手の高齢化により、管理が難しい状況があります。小さな公園を今後どのように活用し再整備すべきかについて、乳幼児をもつ子育て世代の小さな公園の活用状況に関する共同研究を兵庫県立大学と実施し、孤立孤独予防に資する社会包摂と循環型の公園管理の実現にむけた社会実験に取り組んでいます。2023 年度は、学生団体 GREEN LAB. を設立し、若い世代にとっても、小さな公園の活用管理が SDG s に身近に貢献できる有意義な居場所となるように、グリーンロスをなくす管理・活用の提案づくりとプロモーション、社会包摂型管理活動の実装支援などに取り組んでいます。

■基本情報

○官民連携事例

○事業の実施機関：姫路市 建設局公園部公園緑地課

- ・対象地域：姫路市全域
- ・連携の実施機関

兵庫県立大学（兵庫県公立大学法人）、

特定非営利活動法人スローサエティ協会（特定非営利活動法人）、

リビングソイル研究所、GREEN LAB.（任意団体（学生））

○対象者のライフステージ区分

年齢や属性を問わない

■取材をして

公園が孤独孤立対策の拠点になって、人々が集い、憩いと交流の場として愛され、愛着の結果として自分たちで維持管理もできるようになったら、みんなハッピーなんじゃないか…。そんなことを夢見ながら取組みを始めているのが兵庫県の姫路市だ。

姫路市と兵庫県立大学の共同研究報告書はそれを「空間的処方」と呼ぶ。「空間的処方とは、生活的・情緒的・実用的なニーズを持つ人々が、自らの健康とウェルビーイングの改善につながる解決策を自ら見出すことを助けるために、物理的な場所や関係性に基づいて提供される手段と定義する。たとえば、居場所、公園、コミュニティ空間などである」（「次世代の小規模公園のあり方と管理方法に関する研究 ～地域住民の孤立孤独予防に資する公園～」2023年3月31日）

種類増えることは、孤独・孤立型の予防になるといえる。Table11の全体傾向として、小さい公園、大きい公園、児童館の順に不特定交流の場所としての空間利用が高いと言える。(中略)つまり、不特定交流の場所を増やすには、全体傾向として大きな公園や小さな公園が、農村地区においてはすこやか広場が、新たな出会いを生み出す場所として有効であろう」こうした調査研究の結果、内平さんたちは、小さな公園も孤独孤立の予防効果があることを明らかにした。

* * *

しかし少子化や人口減少で、公園利用者は減っていくだろうと考えるのが自然だ。もし減っていくのだとしたら、考えるべきは公園の「活用」ではなく、小中学校のような「統廃合」ではないだろうか。

当然、少子化や人口減少は自治体財政も厳しくしていく。維持管理費用も考えなければならない。おまけに姫路市には公園が多い。人口50万の都市に958の公園がある(令和2年3月時点)。小規模公園の活用、空間的処方、市民は求めているのだろうか。

そこで姫路市と兵庫県立大学は、姫路市民の「公園の維持および改善に対する支払意思額(Willing To Pay=WTP)」を試算した。

結論はこうだ。

- ・姫路市民は、公園の〈維持〉に一世帯あたり年間で一定額を支出する意思があると推計された(平均値1,332~1,523円、中央値744~750円)。

- ・公園の〈改善〉に対する支払意思額は、平均値1,390~1,559円、中央値820~846円と推計された。

- ・身近な小さな公園を〈維持〉する便益は、年間約1億8千万円、将来にわたる総便益は、20年間で約26億5千万円、50年間で約41億円だった。

- ・身近な小さな公園を〈改善〉することによる便益は、年間約2億5千万円、20年間で約30億円、50年間で約46億円だった。

- ・身近な小さな公園の改善に関して、木陰を増やすこと、防災機能を増やすこと、季節を感じられるようにすることといった改善案を姫路市民が求めていることがわかった。また、主な利用者である子どもが安心して遊べる場所をつくるため、清掃を行い、見晴らしを良くするなどの工夫が必要である。

身近な小さな公園には、落ち着ける場所や特定・不特定の交流する場所としての市民のニーズがあり、そして市民にはその維持や改善に対して一定額を支払う意思がある。だとしたら、その市民の声に応えられるような公園づくりができないか。——それで冒頭の山野井公園のモデル実践が生まれた。



(バッジも生まれた)

* * *

始まったばかりのモデル事業であり、当然ながら課題も多い。

「モデル実施の公園数は3つ。約800ある小規模公園全体の維持管理を考えると、先はまだまだ長い」と言うのは、姫路市の公園管理課の福本好城さん。

また、この話は公園のあり方全体にまで波及する、とりビングソイル研究所の西山さんは指摘する。「日本の小規模公園の多くは、周辺部に公園を囲むように木を植えている。そのため中央部に木陰がなく、近年の酷暑の中では子どもを公園で遊ばせられない。また、周辺部の木は少し伸びると隣家などの敷地内に枝が伸び、葉が落ちてしまうので、こまめに剪定しなければならなくなる。中央に大きな木を配置する形にすれば、木陰もできるし、剪定の手間も相当省けて、維持管理もしやすくなる」。なるほど…。

しかし課題は多いものの、内平さんらの構想は姫路市全体のトータルな社会環境変化に及ぶ。

内平さんは「孤独・孤立の根本原因は社会環境の機能低下」と「それを育む余力のない現代社会」にあるとする。その上で「つながりが感じられ、コミュニティが形成される『場所』を共創するゼロ次予防モデルの開発」を掲げ、1次から3次予防とも絡めた重層的な孤独孤立予防モデルの構築を構想する。

■ 重層的孤立孤独予防モデルの構築

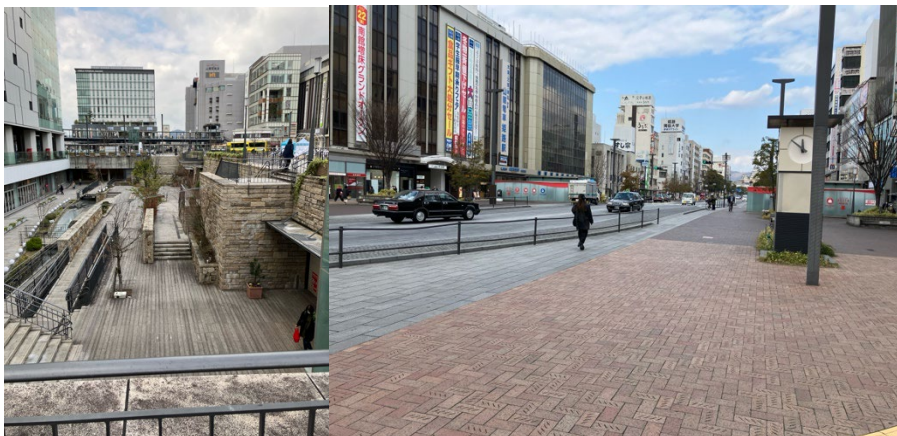
兵庫県立大学内平隆之2023/12/07作成

予防モデル	概要	孤立・孤独状態	主なリスクファクター	戦略的PM
ゼロ次予防モデル	発症やリスクファクターにつながる社会的、経済的、文化的な環境要因に着目し、それらを改善することで集団における孤立・孤独を減らす介入方法。	孤立感の増減 孤独感の増減 (環境認知の悪化)	出歩きたくない 立ち寄りの敬遠	歩きやすいまちづくり 個でも立ち寄れる 心理的安全性の向上 (公園づくりなど)
1次予防モデル	孤立・孤独が発生する前に行われる、主に個人に介入する生活習慣の改善、予防支援、診断、教育などの介入方法。	非孤立・非孤独型 (居場所の喪失)	複合的性格特性 話し相手に乏しい。 ワーク・ライフバランスの悪化。	なじみの拠点・店づくり (community-shed, Chatter and Natter, After Schoolなど)
2次予防モデル	すでに孤立か、孤独が存在する場合に、それを進行や悪化から守るための予防策早期発見・早期支援を行う介入方法	孤立・非孤独型 非孤立・孤独型 (閉じこもり)	転入、離別、失業、慢性疾患、可処分所得の低下、育児・介護による行動範囲の縮小	誘い出し支援 有意義な情報のリーチ、 役立つ活動への勧誘 (Be-freending, Walking- soccer 等)
3次予防モデル	すでに孤立・孤独が複合して発生している場合、障害による機能の低下や合併症を最小限に抑え、生活の質を向上させることが目的の予防介入。	孤立・孤独型 (引きこもり)	外出障害・制限(精神疾患、運動障害、入院・長期療養、長期失業)、近隣における行動選択肢の喪失(店舗・施設の閉店など)	移動型支援 空き地活用 (移動販売車、移動博物館、 移動図書館など)

(内平隆之 JST-RISTEX「孤立・孤独予防に資する近隣社会環境の多様性の可視化による戦略的プレイスメイキング」の説明資料より。)

こうした方向性は、昨日今日に端を発した話ではない。

姫路市は10年前の姫路駅北駅前広場の再整備事業で有名になった。最初は、よくあるバスやタクシープール中心の整備計画だったが、市民の声を受けて、ゆとりのある歩行空間・環境空間・交流空間を備えた広場(姫路駅北駅前広場)を実現した。コンセプトはウォークアブル(walkable)。車よりも人にやさしい空間づくりということだ。



(北駅前広場と歩道の様子。広い歩道が確保され、人が車から「守られて」いる)

そのときにつながったのが、姫路市と内平さん、山野井公園まつりを主宰したNPO法人スローサエティ理事長の米谷啓和さんらで、今回のモデル事業もそのメンバーで推進して

いる。

駅前広場とモデル公園づくりは人にやさしい公共空間の再構築で一貫しており、孤独孤立対策は、テーマこそ新しいものの、これまでの取組みにすでに組み込まれていたテーマだと言えるだろう。

孤独孤立対策は、まったく新しい取組みを構築するというよりは、さまざまな地域・分野（福祉、エリアマネジメント等）で行われてきた取組みに大きな傘をかけ、それらをより自覚的・横断的に推進していくための契機と捉えるのが妥当なのだろう。

最後に。

取材の中で、内平さんが「緑のジェノサイド（虐殺）」という言葉を使ったのが妙に印象に残っている。頻繁に剪定するコストをかけられないので、剪定の際に枝も葉も大胆に切り落とし、木を見るも無惨な様子になってしまうことを指して言っていた。取材後に姫路駅まで送ってもらうとき、姫路市の福本さんが「あんな感じですよ」と指差した車外の樹木は、まさにその言葉通りの姿になっていた。

私たちは人間至上主義の中で動物や植物を人間の都合のよいように使ってきたが、その時代が終わりつつあるのではないかという警句を含んだ歴史書『サピエンス全史』が世界中のベストセラーとなる時代を生きている。テクノロジーを含めた私たちの「力」を何に使うのか。何度も繰り返し考えていかなければならない、と感じる。



(私の自宅近くの街路樹も、まさに見るも無惨な姿になっていた)

(参考文献)

文中紹介した論文は、以下でダウンロードできる

- ・内平隆之, 中畠一憲「乳幼児を持つ保護者の孤立・孤独予防に資する空間利用傾向 兵庫県姫路市の乳幼児を持つ保護者を対象とした無作為抽出アンケート調査における孤立・孤独複合類型分析」
- ・リビングソイル研究所
- ・NPO 法人スローソサエティ
- ・姫路駅北駅前広場の経緯と概要は、姫路市のページと国交省のページにまとめられている
- ・都市公園のあり方については、近年国交省でも検討が行われている。
都市公園の柔軟な管理運営のあり方に関する検討会提言「都市公園新時代 ～公園が活きる、人がつながる、まちが変わる～」(2022年10月)

(取材者 湯浅誠)

姫路市兵庫県立大学共同研究事業 実施体制

※世代の小規模公園のあり方と管理方法に関する研究
～地域住民の孤立孤独予防に資する公園～

